



## 紫芳会だより ～輝く先輩達～

No.36  
2015.9.1.発行

神経内科医・作家

# 米山 公啓 氏 (高校23期)

### ～～ 面白いものを探そう ～～

60歳を過ぎててもいまだに、私は高校生の気分なのかもしれない。立高の時代、決して優等生でもなく、勉強に意欲があったとも思えない。しかし、それでも自分がやりたいことを十分にやってきた。それができたのは間違いなく立高のときの様々な経験が元になっている。

立高の1年生のときは、3年生の女子学生と大恋愛をして、毎日日記の交換(当時はスマホなどないから)をして、自分の気持ちを書き続け、それが結果的に自分を見つめるチャンスやら、物書き業になる下地になったように思う。あの頃はとにかく本を読み続けていた。毎日1冊読んで読書感想を書いていた。第三の新人と言われた時代で、有能な作家がたくさん出てきた時代で、純文学から筒井康隆までとにかく乱読していた。その割には、学内の現代国語の試験で、学年最低点を取った記憶がある。

... ◇ ... ◇ ... ◇ ... ◇ ... ◇ ... ◇ ... ◇ ...

その私が、現在までに280冊の本を出し、健康に関するテレビ番組にはほぼすべて出演して、脳科学のことで雑誌などに出ている。最近では横尾忠則さんと対談までした。団塊世代にとっては、横尾さんはあこがれのアーティストだった。その人とまさか対談するとは思ってもいなかった。

高校時代は放送部にいて、詩を書いて、朗読などやっていたのだから、赤面ものだが、それだけ純粹だったのかもしれない。

なんとか医学部に入って、医者になり、決して一流とは言えない医学部の助教授にまでなったが、小説を書きたくなくなって辞めてしまい。その後は、10年間は本を書きまくった。結局小説は売れないまま終わってしまったが、脳活性の実用書が売れて、なんとか出版界にとどまっている。



ボラボラ島にて

... ◇ ... ◇ ... ◇ ... ◇ ... ◇ ... ◇ ... ◇ ...

いまは開業医として週の半分働き、週末は都内の事務所で、テレビ番組の企画や雑誌のインタビューを受けるという生活だ。決して計画的ではない人生なのだが、北杜夫にあこがれて医者になり、運良く取材という形で、世界中の大型客船に乗って、南極と北極以外の海は制覇した。むろん人生など予定通りにはいかない。しかし、自分がやりたいことを見つけ、それに熱中できる人生は最高に面白い。結果がどうあれ後悔などしている暇はない。高校時代、何か自分が本当に好きになれることを見つけられるだけで、もう十分、将来が見えてきたということだ。